

## Nature 誌編集長 Philip Campbell 氏に聞く 「精神疾患のための10年 (A Decade for Psychiatric Disorders)」

小池 進介<sup>1)</sup>, 西田 淳志<sup>2)</sup>, 山崎 修道<sup>3)</sup>, 安藤 俊太郎<sup>1,2,4)</sup>

Shinsuke Koike, Atsushi Nishida, Syudo Yamasaki, Shuntaro Ando :  
Interview with the Editor-in-chief of Nature—A Decade for Psychiatric Disorders—

Nature 誌は自然科学研究の最も権威のある雑誌の1つであるが、近年、精神疾患についての印象的な総説、特集が数多く掲載されるようになった。2010年新年号の巻頭言に「A decade for psychiatric disorders (精神疾患のための10年)」を発表した。「精神疾患のための10年」は、その表題が印象的なだけでなく、精神疾患を取り巻く現状と今後の展望を簡潔にまとめたもので、2010年代の最初の年の巻頭言として大変象徴的な発表であった。今回、この巻頭言を発表した経緯について、Nature 誌編集長であり、「精神疾患のための10年」の執筆者でもある Philip Campbell 氏にインタビューを行った。Campbell 氏がこの巻頭言を執筆するに至った背景は、科学の発展によって精神疾患の病態が徐々に解明されつつあるものの、がんと比べて施策や研究環境についてはまだ隔たりが大きく、その状況を打破するために Nature 誌として貢献できるのではないかと考えたからとしていた。また、その実現に向けて、スティグマによって精神疾患が覆い隠されている状況を変え、一般市民に精神疾患の重要性をより理解してもらう必要があり、そのためにはメディアに正しい情報を発信してもらうことが非常に重要であると指摘した。さらに、近年の神経科学における目覚ましい発展をもとに、将来の精神疾患研究に対する期待を述べられ、その方向性は近年の Nature 誌に色濃く反映されていると感じられた。「精神疾患のための10年」の最後に、「いまだに多くの精神科医は、最先端の生物学に触れているとは言い難い。このこともまた、次の10年間で変わっていく必要がある」とある。精神科医はスティグマ問題から科学技術の発展に至るまで、現状を把握し、精神科医としての考えやあり方を変化させていく必要があると感じさせられたインタビューであった。

<索引用語：精神保健政策，精神疾患，統合失調症，スティグマ，メディア>

### 1. インタビューの背景

Nature 誌は自然科学研究の最も権威のある雑誌の1つであるが、近年、精神疾患領域での印象的な総説、特集が掲載されるようになった。2008

年の「The mental wealth of nations」<sup>2)</sup>と題された論文では、精神的な健康を国の資産「Mental capital」として位置づけ、人生のステージに応じた精神的な健康を推進する政策を導入すべきで

著者所属：1) 東京大学大学院医学系研究科精神医学分野, Department of Neuropsychiatry, Graduate School of Medicine, the University of Tokyo

2) 東京都医学総合研究所心の健康づくりプロジェクト, Department of Psychiatry & Behavioral Science, Tokyo Metropolitan Institute of Medical Science

3) 東京大学医学部医学系研究科コースメンタルヘルズ講座, Department of Youth Mental Health, Graduate School of Medicine, the University of Tokyo

4) The Institute of Psychiatry, King's College London

あると主張し、注目を集めた。さらに、2年後の2010年新年号の巻頭言に「A decade for psychiatric disorders (精神疾患のための10年)」<sup>1)</sup>を公表した。その後も統合失調症特集(2010年468巻7321号)など、さまざまな精神疾患研究についての特集が続いている<sup>6)</sup>。特に「精神疾患のための10年」は、その表題が印象的なだけでなく、精神疾患を取り巻く現状と今後の展望を簡潔にまとめたもので、2010年代の最初の年の巻頭言として大変象徴的な発表であった。本資料の提供者らはその記事を広く知ってもらうため日本語の翻訳出版を依頼し、Nature Asia-Pacific社より発行していただいた。その縁もあり今回、なぜこういった内容を発表するに至ったのかについて、Nature誌編集長であり、「精神疾患のための10年」の執筆者でもあるPhilip Campbell氏にインタビューを行った。

## 2. 「A decade for psychiatric disorders」

### 執筆の経緯

Nature誌は、あらゆる種類の基礎神経科学に関する記事を掲載してきました。その中で、精神疾患について神経科学的な課題があることがわかってきました。それはすでにNature誌の記事の中でも問題提起されていましたので、改めて特別なアクションを起こす必要はありませんでした。しかし、調べているうちに、がんと比べて精神疾患に対する研究支援は大きくかけ離れていることがわかりました。私は、慈善団体Cancer Research UKの理事を務めています。Cancer Research UKは寄付のみで支えられており、政府からの支援なしに毎年500万ポンド(6億6千万円:1ポンド=135.6円)の寄付を受けています。イギリスに限った話ですが、がん研究の額と、こころの健康に関する研究費の額には、かなり格差があります。

一方で、私自身の経験から、精神疾患を患うことが、社会的にどういう意味を持つのか、よりはっきりわかってきました。精神疾患を取り巻く社会環境に対して、何かアクションを起こさなければ

ならない、と感じてきました。実は私の親族にも統合失調症を患っている人がいます。ですので、私は統合失調症がどういうものか、特によく知っています。

思い返すと、最初、私は精神疾患ではなく、認知機能の強化に興味を持っていました。精神疾患についてではなかったのです。いずれ、認知機能の強化について社会的な議論が起これると考えて多くのアクションを起こしましたが、その議論とは、認知機能を改善する薬を使っている健康な人々に関してのものだけでした。

認知機能の強化についてアクションを起こすと、自ずと精神保健分野の専門家にも会うようになってきました。先ほどお話したように、私は精神疾患に関する課題について多くのことを行う必要があると感じていたので、精神保健の専門家にそのことを伝え、論文を送ってもらうようになりました。

ForesightプログラムのMental Capital and Wellbeingについてもよく知っています。Foresightプログラムは、イギリス政府の科学政策全般に関わっていて、科学的な知見から10~20年先の社会的な問題を捉えて、政府が何をすべきか、という政策課題を明らかにしようとするものです。Foresightプログラムが始まったのはちょうど2年前のことでした。

私には、Foresightプログラムが政府にどのような影響を与えるかわかりません。最近、政府高官の1人にメールで尋ねてみたくらいです。人生における精神的幸福の全体を俯瞰するような試みを行っている国は、イギリスの他には私は知りません。ですから、他の国の人々に人生を見渡すようなイギリスの試みが刺激を与えるかどうかわかりません。ですが、とにかくこれが最初のNature誌の取り組みでした。

Nature誌では毎年、現在何が注目されつつあるのかを年初の論説でまとめることになっています。私は、科学が精神疾患に何らかの貢献をすることができる時期に来ていると考え、年初の論説

で、精神疾患は注目されるべきだが、いまだ十分に注目されていない、ということを取り上げようと決めました。それは私自身の直観からだけではなく、他の科学者や公衆衛生の専門家とも議論をして決めました。

2010年最初の巻頭言を掲載したことが、まず1つ目のアクションでした。次に、精神疾患の中でも統合失調症に特に注目するようにしました。統合失調症に特に注目した理由は、疾患へのスティグマが最も大きいからです。これはイギリスでは明白です。Nature誌としてはそれだけではなく、統合失調症に関するいくつかの研究がはっきりと実を結び始めていることも重要な要因でした。実は統合失調症に関して、Nature誌は元々あまり熱意がありませんでした。

統合失調症が、統合失調症以外の精神病状態とは完全に区別できないことは、非常に興味深いことだと思っています。と同時に、統合失調症が、私たちが考えていたよりもずっと複雑だということもあります。ですので、統合失調症研究の進歩は、決して単純なものではありませんし、実際、複雑な進展を見せています。だから、私たちは統合失調症に注目しなければいけないのです。

この巻頭言を発表した後、2つの大きな流れがあったと考えています。結果的に、精神疾患に関する論文は数多く投稿されるようになりました。しかし、Nature誌としてはこれまで通り、基礎研究に焦点を絞るようにしています。当然のことですが、Nature誌が精神保健の雑誌になってしまうことはありません。しかし、私たちは学会に参加し、統合失調症やその他の精神疾患に関して、脳やその疾患の生物学を明らかにしてくれるような論文を投稿するよう研究者を応援しています。これが現在のNature誌の視点です。

研究だけではなく、現在進展しているイギリス政府や精神疾患の研究資金にも関心を寄せています。格差のうちの1つは、がん研究におけるCancer Research UKのような、精神保健研究に出資する寄付団体がないことです。この格差は、

今まさに変わろうとしています。Welcome Trust (ロンドンに本拠地を持つ医学研究支援などを目的とする民間出資の公益団体)が、寄付団体の立ち上げを決めました。この寄付団体はWelcome Trustから独立したものになりますが、Welcome Trustから約2000万ポンド(約27億1千万円)というかなりの寄付を受けます。寄付団体の名称は決まっていますが、私はこの寄付団体の理事になる予定です。研究資金の目標や戦略を決めなければならないので、ここ数ヶ月では正式には立ち上がりません。寄付団体には、基礎的な神経科学だけではなく、公衆衛生分野の研究も入るでしょう。また、イギリスだけに限らず、世界中が対象になるでしょう。

私たちは、日本や他の国での研究のニーズや機会についてもとても興味があります。しかし国際研究を行うには、2000万ポンドでは規模が小さすぎますので、私たちはさらに規模を大きくするように働きかけなければいけません。基金は、全て広く一般から寄付を募るものです。家族に精神疾患を持つ人がいたり、寄付に興味がある裕福な人や、企業から始めることになるでしょうが、いずれ世界中でこのような取り組みを進めていきます。もしアジア太平洋地域に手助けが必要な人がいれば、私たちはその人のニーズを聞きたいと思っています。また、アジア環太平洋地域での研究をサポートしたいとも思っています。

この寄付は新しいタイプの寄付です。私たちが本当に重要な一歩を踏み出せるころまで科学が進歩したのだという確信なしには、こうした新しい寄付を創設することはできないでしょう。今この寄付団体では、焦点をどこに当てていくか決めることが大きな課題になっています。全ての領域をカバーすることはできないからです。

以上が、「A decade for psychiatric disorders」を執筆し、2010年最初の巻頭言に掲載した経緯です。なぜNatureが精神疾患に興味を持ったのか、そして今Nature誌の中で何が起きているのか、という質問に対する答えになります。

### 3. スティグマ戦略について

イギリスには Rethink という自然発生的な患者団体があり、同時に寄付団体でもあります。Rethink はスティグマに焦点を当てて、キャンペーンを行っています。私の考えも変わってきていて、スティグマの問題というのはいわゆる社会の中で受けるスティグマのことだけではなく、Rethink のような活動や、精神保健に関する研究活動への評価が足りないということもスティグマの影響として対処するべきだと思います。

現在のイギリス国内のことについてだけであれば、私たちは非常に素晴らしい国家的ながん戦略を持っています。保守党政権も労働党政権も、がんの重要性を主張し続けています。政府は多くの予算を特にがん対策に当ててきました。現在も定期的に、がん対策についてのテレビCMを放映していて、国民がどうすればがん対策に寄付ができるのかも伝えています。がん対策を進め、サポートすることによって、社会をより良くするために、包括的な取り組みが行われています。

私は、今後10年間で精神疾患対策も、がん対策が進めているような方向に進むことができと思っています。イギリス国内にもそうした動きに立ち上がった有名人はいます。しかし、皆さん「私はうつ病です」と言って、うつ病の話をしませんが、統合失調症については、「私は統合失調症です」と言って、統合失調症の話をする有名人はまだ誰もいません。私たちが、こうした有名人を見つけられるかはわかりません。ですので、まずは徐々に、統合失調症の当事者によるカミングアウトを進めて行こうという計画があります。精神保健に関する国家的なキャンペーン“Time to change”<sup>5)</sup>です。

あなた方も見かけたかもしれませんが、ロンドンでは“Time to change”の広告を目にする機会が増えていきます。“Time to change”キャンペーンがどのくらいの深さで、どのくらいの期間行われ、どのくらい効果的なのかはまだわかりませんが、Rethink のような取り組みは、今後増えて大きくなっていくだろうと私は考えています。

もちろん、目の見えない方や、何らかの疾患・障害を持った方と同様に、精神疾患を持っている方を理解してくれる人もいます。ですが普通は、目の見えない方や、心臓が悪い方などの障害を持つ方と同じように、精神疾患を持っている方を理解して受け入れることは、とても難しいことだと私は思っています。

精神疾患のことを必ずしもよく知らない一般の方々を対象に働きかけるのは、今までよりも大きな挑戦になります。私は、この特別な問題に巻き込まれています。これは挑戦なのです。私は、皮肉として「巻き込まれている」と言っているわけではありません。私が精神疾患を知らない人たちに対して影響力があるのであれば、その影響力を使うことがとても大切だという意味です。

私にとっては、親族についての経験が重要でした。私の親族は、軽症の統合失調症で、治療が上手くいっているケースなんです。彼女は、家族からとても良いサポートを受けています。しかしそのために、彼女自身の生活能力が弱くなっている面もあります。また、アメリカでは非常に多くの統合失調症患者が犯罪者として刑務所に収監されています。挑戦はまだ続きます。

私たちは精神疾患へのスティグマをどうすれば改善できるのか？ どうすれば、統合失調症のスティグマと戦うことができるのか？ これは最も難しい挑戦の1つだと考えています。なぜかと言うと、メディアがスティグマの問題に重要な役割を果たしているからです。

これは私からのメッセージの中でも一番重要なことなのですが、もし今起っている精神保健を取り巻く一連の出来事をジャーナリストが頻繁かつ十分に伝えられれば、精神保健に関する一般市民の関心を引き、優先順位を上げていくことができるでしょう。マスメディアへ向けて、例えば精神疾患により職を失い、辛い日々を過ごしている体験を語ることは、良い方法だと思います。

イギリスでは、「サイエンスメディアセンター」が数年前に少人数で作られました。このセンター

では、ジャーナリストが科学者にいつでも話を聴くことができます。ですので、もし地震が起きたり、新しい政策が提案されたりした時に、サイエンスメディアセンターでジャーナリストは話を聴くことができます。サイエンスメディアセンターはとても成功していて、現在、カナダやオーストラリアでも同じようなセンターができ始めています。もしかしたら他の国にもあるかもしれません。

認知機能リハビリテーションを研究している Til Wykes は、資金を得て、メディアセンター内に精神保健のためだけに働く人を雇いました。何か出来事が起こった時に、その人が報道機関に出来事の概要を説明して、科学者からの説明を引用するようにしています。このような体制によって、ジャーナリストはより良い科学的な情報を得ることができるようになりました。

もともとは Wykes 自身がジャーナリストに時間をかけて説明をしていたのですが、その中で、ジャーナリストは精神保健への理解がほとんどないことがわかったんです。ほとんどのジャーナリストも元々は科学者であり、科学的な素養を持った人たちなのですが、精神保健に関しての理解がほとんどなかったのです。ジャーナリストはただ単に事実を知らないだけなんです。ジャーナリストは精神保健の知識について、現在ぐんぐん学んでいる途上なのです。イギリスの新聞誌上には、ある小さなジャーナリストグループがあって、Wykes はそこで、精神保健についてすぐに教えることができます。逆にジャーナリストも、Wykes の発信する情報に非常に興味を持っています。

日本で何が実際にできるのかどうか私はわかりませんが、本当の意味でインパクトを与えるためには、メディアと協力して、わかりやすく情報を伝えることが非常に重要だと思います。

#### 4. 精神保健予算、研究費の獲得について

イギリスでは、Medical Research Council (国家予算を受けて、各医学研究に配分する独立機関) が精神保健戦略を作成しています。また、Welcome Trust では精神保健研究に関する支援が増加しています。一方、アメリカでは、National Institute of Mental Health の予算が依然として強大です。精神保健への研究資金が増加するように働きかけることも重要な目標の1つです。この問題には、スティグマの存在も関わっていると思います。ただし、スティグマだけが問題なわけではなく、がんの場合と同じように、一般市民の関心を引くことがとても大切だと思います。がんの領域は一般市民の関心を引いた結果、目覚ましい進歩を遂げていますよね。そして、明らかに今までは違うタイプの良い薬が使われつつあります。しかし、政府や一般市民も、アルツハイマー病やパーキンソン病ですら、きちんと認識はしていても、重要な問題だとは認識していないのです。

統合失調症やうつ病に至っては、今現在負担が重くのしかかっているにもかかわらず、全くと言っていいほどその事実が公表されていません。ですので、誰も精神疾患が大変な問題だとは認識していないのです。この現状は不公平ではないでしょうか? DALYs\*1 を用いると、精神保健の問題は最上位になります。イギリスでは、まさにそ

\*1 DALYs (Disability Adjusted Life Years, 障害調整生命年, もしくは寿命・健康ロス): WHO や世界銀行が用いている, 病気や事故等がどれだけ社会に影響を与えているかを示す指標である。病気などにより死が早まることで失われる生命年数 (YLL=寿命ロス) と, 健康でない状態で生活することによって失われている生命年数 (YLD=健康ロス) の合計で算出する。式で表すと以下ようになる。

$$DALYs = YLL (\text{病気によって失った平均余命} \times \text{患者数}) + YLD (\text{障害を抱えて生活する年数} \times \text{障害ウエイト} \times \text{患者数})$$

精神疾患は、罹患してすぐ命をおとすことは比較的少ないが、若い世代から罹患し、人生のかなりの部分を障害を抱えながら生活していかなければならないのが特徴である。日本をはじめとした先進国では、精神疾患が最上位に位置する。

のようなメッセージを広げようとしています。私が思うに、頭では皆わかるのですが、行動につながないことが問題だと思います。

資金の振り分けに関してもジレンマもあります。たとえば500万ポンドを、基礎的な神経科学か、それとも薬物治療やサービス提供の改善にすぐに役立つような公衆衛生の研究かいずれかに使うことができる場合、すぐに明確な結果が出るという理由で、使い道を決定してよいのかという問題です。今後立ち上げようとしている寄付団体に関しては、こういったジレンマにぶつかるかどうかはまだわかりませんが。

精神保健に関する国際調査も重要です。現在 Grand Challenges という国際的なプログラムが行われていて、その中で精神保健に関するものは、Global Mental Health というプログラムがあります<sup>3)</sup>。もう1つ、アメリカの NIMH が行っている国際的なプログラムがあります。Nature 誌でも、私自身も非常に興味があるのですが、精神保健の国際動向をきちんとフォローできているわけではありません。先ほどご紹介した寄付団体でも、しっかりとした国際比較ができているとは思いません。ですので、このことも私たちが感じるギャップだと思います。このギャップを埋めるような仕事をしている人は、私は知りません。WHO がおそらくこのギャップを埋める仕事をするものだと思いますが、負担が多くなかなかできていないようです。

### 5. 統合失調症の未来について

私は統合失調症の専門家ではありませんので、正直わかりません。あくまで印象ですが、現時点で統合失調症を完全に無くしてしまうことは無理ではないかという気がします。統合失調症の要因は、あなた方も持っていますし、生まれたときから持っていますよね。統合失調症に関わる要因は、非常に様々な要因があります。よくご存知かと思いますが、統合失調症の要因が明確になっていないので、統合失調症と診断されるまでにとっても時間がかかってしまいますよね。ですので、私の希

望は、リスクを早く知ることができるようになり、皆が見ることができるバイオマーカーが見つかることです。あなた方もご存知かと思いますが、もしそういうバイオマーカーが使えるようになれば、統合失調症による影響をかなり減らすことができるようになると思います。そのためには、利用可能な技術は何でも使うべきだと思います。私自身は、現実的で役立つ社会機能・認知機能の指標だけではなく、薬理作用を理解するための薬理的な指標や測定法も必要だと思っています。

それだけで統合失調症を完全に無くすることができると言えば、そうではないと思います。脳はとても複雑なので、そう単純にはいかないと思います。ある精神疾患の状態はとても複雑で、操作可能な1つのタンパク質が関わっている、というような単純なものではないと思います。ただ、あくまで推測ですが、私たちは大きな変化を生み出すことができるとも思っています。そのように考えたいですね。

巻頭言でも書いたように、全ての研究分野が必要になってくるでしょう。現実に変化を生み出すためには、長い時間が必要になってくると思います。

### 6. 2020年に向けた期待

1つは、より多くのコホート研究が行われるようになり、その中にバイオバンクが加わることを希望しています。バイオバンクとは、表現型など全てを見ることができる非常に大きなデータセットのことです。バイオバンクを実現する機会も出てきています。私はバイオバンクが非常に役立つものであると考えています。今後10年間で色々なことが起こるでしょうが、生物学の技術も、光遺伝学(オプトジェネティクス<sup>\*2)</sup>)<sup>4)</sup>が開発されたように進歩するでしょう。特定の細胞のみに、特定の時間だけ遺伝子を発現させたり、抑制させたりできるこの技術が発展すれば、神経細胞の様相をより緻密に観察できるようになるでしょう。神経科学の分野では、非常に大きな変化が起きてくると思っています。

精神保健に関しては、精神疾患の前駆期やさらにその前段階を見ていくことが非常に興味深いテーマだと思っています。全ての人がこのような研究に非常に興味を持っているので、優れた国際的な研究につながるだろうと思っています。国際的な研究が、より役に立つかどうかはわかりません。国際的な研究になると、対象となる患者グループが大きくなってしまいますからです。解決策としては、バイオマーカーを用いることがよいと思います。

臨床現場では、より地域に密着する形で仕事をするようになるでしょう。私には今後どうなっていくかはわかりませんが、たとえば、他の国の患者を診る統合失調症研究者が日本でも出てくるかもしれませんし、共同研究をするのかもしれませんが、10年でどこまで発展するかはわかりませんが、非常に大きな変化が起こると思います。

倫理的な問題も非常に重要になってきます。私は、現時点ではバイオマーカーに関する倫理的問題に注目しています。もしあなたが統合失調症発症のリスクを持った人を見つけた場合、そのリスクが実際の発症につながるかどうかは誰もわかりませんよね。私自身は、このようなシナリオを想像させるような良いワークショップを開けばよいと思っています。教師に対してどのように説明するのか、親に対してどう説明するのか、当事者に対してどう説明するのか、関係するその他の人に対してどう説明するのか、そして、説明された人たちがどのように受け取るのかを考えてもらうとよいと思っています。このようなワークショップを通じて考えることが、神経倫理についても助けになると考えています。

## 7. インタビューを終えて

Campbell氏はもともと宇宙物理学の専門家で、

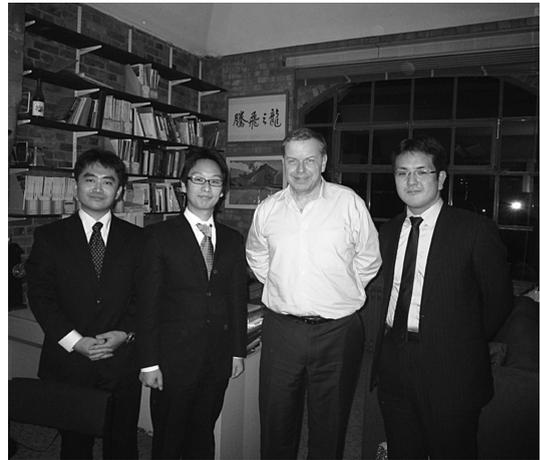


図 インタビュー後、編集長室にて  
左から順に、山崎、小池、Campbell氏、西田。

1995年からNature誌の編集長を務めている。精神疾患に興味を持ち始めたのはほんの数年前からとのことだが、最初に質問してから20分間、精神疾患を取り巻くスティグマの問題から精神保健施策から研究環境において、まだ多くの困難があるものの、近年急速に進歩している神経科学の発展をもとに、精神疾患の見方を変えるべき時が来ていることを話され続けた。そこには、Nature誌を挙げて精神疾患を取り巻く現状を変えたいという強い決意が感じられた。これは「精神疾患のための10年」の副題である、「統合失調症をはじめとする精神疾患の理解と治療を改革する時がまさに来ている」にも強く表れている。また、こうした精神医学の外の動きに、精神科医が答えられていない部分も指摘された。「精神疾患のための10年」の最後に、「いまだに多くの精神科医は、最先端の生物学に触れているとは言い難い。このこともまた、次の10年間で変わっていく必要がある」とある。精神科医はスティグマ問題か

\*2 光遺伝学 (オプトジェネティクス): 遺伝子工学を用い、特定の細胞に光活性化イオンチャネルを発現させ、特定の波長の光を当てることにより、細胞を興奮・抑制させる技術。複雑な脳神経系にある特定の神経細胞の活動をミリ秒単位で制御できることから、神経科学の分野で研究が盛んである。Nature Methods誌による、Method of the Year 2010 に選ばれている。

ら科学技術の発展に至るまで、現状を把握し、精神科医としての考えやあり方を変化させていく必要があると感じさせられたインタビューであった。

#### 謝 辞

最後になりますが、筆者らの無謀なお願いに快く手配していただいたNature Japan社の黒崎正平様、Antoine Bocquet様、大変ご多忙中、インタビューを引き受けてくださったPhilip Campbell様に深く御礼申し上げます。

#### 文 献

- 1) A decade for psychiatric disorders. *Nature*, 463; 9, 2010
- 2) Beddington, J., Cooper, C.L., Field, J., et al.: The mental wealth of nations. *Nature*, 455; 1057-1060, 2008
- 3) Collins, P.Y., Patel, V., Joestl, S.S., et al.: Grand challenges in global mental health. *Nature*, 475; 27-30, 2011
- 4) Deisseroth, K.: Optogenetics. *Nat Methods*, 8; 26-29, 2011
- 5) <http://www.time-to-change.org.uk/>
- 6) Lloyd, K., J. White: Democratizing clinical research. *Nature*, 474; 277-278, 2011

### Interview with the Editor-in-chief of *Nature*—A Decade for Psychiatric Disorders—

Shinsuke KOIKE<sup>1)</sup>, Atsushi NISHIDA<sup>2)</sup>, Syudo YAMASAKI<sup>3)</sup>, Shuntaro ANDO<sup>1,2,4)</sup>

1) *Department of Neuropsychiatry, Graduate School of Medicine, the University of Tokyo*

2) *Department of Psychiatry & Behavioral Science, Tokyo Metropolitan Institute of Medical Science*

3) *Department of Youth Mental Health, Graduate School of Medicine, the University of Tokyo*

4) *The Institute of Psychiatry, King's College London*

*Nature* is the most frequently cited interdisciplinary science journal globally; however, it has recently begun publishing impressive reviews and special topics in the fields of mental health and psychiatric disorders. An editorial entitled, “A decade for psychiatric disorders” was published on the first page of the first 2010 issue of *Nature*. This editorial was a significantly symbolic publication; not only did it have an impressive title, but also consisted of precise and appropriate content in accordance with the present conditions and future perspectives of psychiatric disorders. This was of further significance as it was published on the first page of the first 2010 issue. In this report, we review an interview with the author of the editorial and the editor-in-chief of *Nature*, Dr. Philip Campbell. He explained to us the reason for *Nature* increasingly publishing articles in the fields of mental health and psychiatric disorders, and the reason for this editorial being published in this impressive space. He opined that, although the pathophysiology of psychiatric disorders has been gradually revealed through scientific progress in most research fields, a big gap remains between cancer and psychiatric disorders with regard to health policy and research conditions. The entire editorial team of *Nature* believed that they could contribute in some way to bridge this gap.

He was of the opinion that the media should be apprised with appropriate information on psychiatric disorders by mental health researchers in order to dispel the stigma associated with these disorders and create awareness of the importance of mental health among the public. He drew our attention to the recent brilliant progress in neuroscience research and the future perspectives of mental health research; this trend was notably observed in recent articles in *Nature*. The concluding sentence in “A decade for psychiatric disorders” is, “*Yet the exposure of many psychiatrists to contemporary biology is shallow at best. That, too, will need to change over the next decade.*” Therefore, psychiatrists have to pay close attention not only to the problem of stigma, but also to the scientific progress in psychiatric disorders, and, thus, need to change their thoughts and attitudes.

<Authors' abstract>

<**Key words** : mental health policy, psychiatric disorders, schizophrenia, stigma, media>

---